
碧の宮

亞湮那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

碧の宮

【Nコード】

N7569Y

【作者名】

亞湮那

【あらすじ】

毎日に嫌気が差していた女子高生、椎香。

ある日いきなり異世界「碧の宮」へと連れて来られ、同じように連れて来られた8人と共に、世界を救うため力を貸してほしいと頼まれる。

碧の宮は正体不明のウイルスに汚染されており、今のところ対策は異世界から来た椎香たちにウイルスを除去してもらうことのみ。
今のままでは碧の宮はウイルスによって滅ぼされ、それは椎香たちの住む世界すべての滅亡にもつながるのだという。

頼んできたのは自分にそっくりな顔をした少女。

それぞれまったく別の世界から碧の宮へ連れて来られた仲間たち――
剣術少年・気が強い少女・王様親子・幼い双子・魔法使い見習い・
冷静な医者と共に、言われるがままに旅に出る。

敵に襲われるし、喧嘩はするし、任務は重いし、なぜ自分たちが選ばれたのかもわからない。

そもそも、椎香は他の仲間たちとは違って敵と戦う能力など微塵もない。

だけど、なぜか投げ出せない。

※サイトに連載中の小説です。多くの人の感想がほしいという欲が出たためこちらにも投稿する事にしました。

第1話 それはいきなり起こった

——私は、求めてた。探してた。欲しかった。

私を必要としてくれる存在を。

第1話 それはいきなり起こった

「ただいま……。」

返事が無いことが分かっている、ついその言葉を口に出してしまう。

大川…ではなく笠井椎香、高校1年生。両親の離婚で東京から遠い山裾の田舎町に引っ越して1ヶ月。

自分の意思と全く関係なく始まった新しい生活に、彼女はすっかり嫌気が指していた。

学校が家から遠いうえ通学路にはバスも電車も通っていない、大嫌いな虫はどこにでもいる。

クラスメートにはなじめず友達も出来ない。東京でよく出かけたようなショッピングセンターやカラオケもない…等、この町の欠点は次から次へと出てくる。

「あーあ、つまんない。」

椎香はパソコンの電源をつけ、起動するまでの間にセーラー服を脱

いで部屋着に着替えた。

「ラッキー、新しい話更新されてる。ホームページの管理人さん、旅行から帰って来てたんだ。」

インターネット上の小説を読むのは、彼女の数少ない楽しみのひとつ。

左端の“お気に入り”から今一番ハマっている長編小説を載せているホームページのサイト名をクリックし、この日初めて彼女は笑顔になった。

東京にいたころは放課後も休日も友達と遊ぶ、流行のファッションや芸能人をチェックするなど趣味が多かったが、今はほとんど家で過ごしている。

長編小説の主人公は普通の女子高生だが、ある日彼女が一番気に入っている漫画の中の世界へトリップしてしまい、戻る方法を探しながらもなんだかんだで楽しく過ごす——というストーリー。

「あーあ、いいなー。東京帰れないなら私もこの子みたいに別の世界に行けたらいいのに。今の暮らしより絶対楽しそう。」

寝て起きたら違う世界にいた——というミラクルは実際無いわけで、今日も椎香はいつも通り30分以上歩いて学校に行く。

道の両側は木が茂っていて、勢いよく鳴くセミが彼女の不快指数をどんどん上げていく。

東京の友達は「田舎は東京より涼しいよー。」と言っていたが、こは盆地だからかむしろ東京より暑い。

紫外線を避けるため日傘を差して登校していたら、同じ学校の制服

を着てる女子三人からじろじろ見られていることに気が付いた。
前の学校では日傘を指して登校する女子は珍しくなかったが、ここ
では状況が違っているようだ。

目を合わさず、視線を避けるため早歩きで三人組を追い越す。

ちょっとした違和感や不快感が積み重なり、すでに椎香は自分の現
状への不満が最高潮。

気付けば本気でどこか違う世界へトリップしたい、なんて考え始め
ていた。気に入らないことは考えないのが一番と、椎香はトリップ
の想像を続けることにした。

——そうだなー、出来れば年中秋の世界で、楽しいこといっぱい
……あ、イケメンは必須項目よね。

それで……誰でもいいから私を必要としてくれる人がいる、そん
な世界。

「…………あれ？」

ふっと我に返って周りを見回す。明らかな異変に気が付いた。
周りを歩いているはずの人たちが、“歩いているようなポーズ”で
止まっている。さっきの三人組も同じ状態動いているのは椎香だけ。

「やだ……何これ。怪談？ 都市伝説とか、そういう系？」

一気に怖くなり、夢中で走り出した。誰か普通に動いている人間を
見つけるため、必死であたりを見る。

だが、目に入るものは異変ばかり。青信号なのに車も停まったまま。
セミの声もそういえば聞こえない。

「……何、これ。」

立ち止まり、腕時計を確認した。秒針は止まっている。

「何の冗談……。」

確信した。なぜかは分からないが、とにかく今時間が止まっている。椎香を除いて。

『……か、椎香。』

どこからか椎香の名前を呼ぶ声がした。訝りながらも返事をする。

「……何？」

『いきなり申し訳ありません。私は紫杏、詳しい説明は後程致します。碧の宮へいらして下さい。』

「……は？」

声やんだ次の瞬間、ふわっと体が浮いたような気がした。そして次の瞬間。

「——!!?？」

急に襲ってきたジェットコースターに似た感覚に、椎香は思わず目をつぶった。

10秒だったのか10分だったのか……どれくらいの時間“急降下”していたのかは分からないが、その感覚が止まるのも突然だった。

「きゃっ！」

「ぐえっ！」

どしん！ という音と二人分の声、わずかなお尻の痛みとともに。

「おい、のいてくれ！ 痛い！」

「えっ。」

椎香が声の方——自分の下を見ると、人の上に落ちたという事実に気が付いた。

「わ、ごめんなさい。」

慌てて退いてからよく見ると、その人は椎香と同年くらいの男の子で……少し変わった格好をしている。

「なあ、あんた。ひょっとしてあんたも“紫杏”ってヤツの声、聞こえたのか？」

「も……って事は、あんたも？」

確かにさっきのよく分からない声の主は、自分の事を“紫杏”と名乗っていた。

「おう……随分変わった服だな。そんな服、オレ初めて見たぞ。」

変わった服と少年はいうが、通学途中だった椎香が着ているのは当然普通のセーラー服。

「あんたこそ、変わった格好じゃん。何だかRPGの主人公みたい。」

戦士のようにも見えるが若干古臭い服、腰には剣のような長いもの。ゲーム序盤の主人公のようだという例えはなかなか合っている。

「ろーるプレイングゲーム？　なんだそれ。」

二人の話はいまひとつかみ合わない。必然的に沈黙が訪れる。

「ひあっ！」

「ひゃっ！」

「ぐえっ!!！」

沈黙を破ったのは、また違う人間。子供が二人、再び少年の上に落ちてきた。

「わあ、溜々。人踏んでるよ、ボクラ。」

「きゃ、本当！　早くのかないと、露々。」

「おにーさん、ごめんなさい！」

二人は顔も声もそっくりで、双子だろうかとたやすく予想できる。

「あ、いや……あんた達も、あれか？ “紫杏”に呼ばれたのか？」

「はい、そーです。」

「おにーさんとおねーさんもですか？」

「そうみたいなの。何なんだろうね……。」

四人で話していると、急に小さい二人のうち露々と呼ばれていた方がもう一人――溜々の手を引き、後ろにざっと下がった。

椎香も少年も二人の行動の意味が分からず、「何？」と思った次の瞬間。

「うわっ！」

「っ！」

また別の人が落ちてきた。今度は椎香よりもいくらか年上だと思われる青年に、彼とそっくりな小学生くらいの少年。

「な、何が起こったんだ？ なあ、ここどこだよ！」

落ちてきた少年の方は戸惑いを全く隠さず椎香たちを見つけ聞いてくるが、答えられる人間がいるはずもない。

どこかから落ちてきた人間はこれで6人目。何が起こったのかなど全員が聞きたい。

「わっ！」

「きゃあっ！」

「痛てっ！」

また次、今度は三人がそれぞれ少し離れた場所に、ほぼ同じタイミングで落ちてきた。

「ちょっとー、何なのよ、これ！」

「ご、ごめんなさい！ 私にも分かりません！」

「いてて……ここは、これは一体……。」

混乱し続ける椎香たち、計9人。そしてその次は誰も落ちてこず、代わりに例の“紫杏”の声が空から聞こえてきた。

『これでようやく、全員揃いました。手荒な真似をしてしまい、申し訳ありません。』

「あー、あんたさっきの！」

全員が声の方向を向き、最後に降ってきた内の一人、椎香と同じ位の年齢の少女がその方向に向かって叫んだ。

「どういう事？ ここはどこなのよ！」

『遅くなりましたが、今から説明致します。』

声が止んだ次の瞬間、何もない場所が急に光り出し、二人の少女が現れた。

「……え、あたし？」

椎香が無意識に呟くほど、その内の一人は彼女によく似ている。よく見たら髪型も違うし向こうは巫女服に似た服を着ている点でかなり違っているが、同じ格好をしたら双子のように見えるだろう。

「改めて自己紹介致します。私は紫杏、この碧の宮の巫女一家に仕える占い師です。」

最初に口を開いたのは椎香に似ていない方の少女。

“碧の宮”とはここの事ですか？」

「ええ。そしてこちらが……。」

続いてもう一人の少女も口を開いた。

「私は雪路と申します。この地を治める“碧の巫女”の妹です。」

「碧の……巫女？」

「はい。皆様をこの場所へ導いたのは私たち二人です。皆様にお願いがございまして。」

「お願いって何なんだ？」

「碧の宮と皆様それぞれが生きてきた場所——世界全てを、救って下さい。」

第2話 まるでファンタジーのような展開

——つまらない現実よりも、楽しそうな別世界に行きたい。

その願いが叶ったと思えないこともないが、実際来たら混乱するだけなのだ。椎香は知ることとなった。

第2話 まるでファンタジーのような展開

突然止まった世界、自分が落ちた“碧の宮”という場所、同じように落ちてきた人々、現れた二人の少女。

これだけたくさんの事がほぼ一度に起こって混乱しない人間がいなわけはなく、椎香もちろん例外ではない。

「世界を救うって、一体何なんだよ。」

「ええ、順を追って説明します、緋凧。」

「えっ…俺の名前。」

「椎香、緋凧、瑠々、露々、神冥、神詠、彪砂、羅歌、十和。」

自らを雪路と名乗る椎香に似た少女は、なぜか彼女の名前を知っている。

その他の名前は残り八人のそれだったらしく、全員が彼女と同じ驚きと疑問を感じていた。

「まず、此処と貴方方それぞれの世界の事からご説明致します。」

そう言い、雪路と紫杏は説明を始めた。

まず、椎香達9人はそれぞれ違う世界（ただし瑠々と露々、神冥と神詠はそれぞれ同じ世界）からここへ集められた。

そして違う世界と言っても、出身が“日本”なのはみんな同じらしい。

「みんな日本から来た……というのは？」

「平行世界……と言えいいのでしょうか。一つの地球にいくつもの別世界が存在しているのです。」

「つまり、俺がいた日本以外に、色んな日本——世界が存在するって訳か。」

そして、この碧の宮はいくつもの世界の中で唯一、他の世界の存在を知っていて、必要に応じて何らかの干渉をする事が出来る。

「“必要に応じた干渉”が、アタシ達をここに連れてきた事？」

彪砂が尋ねて、紫杏が頷いた。

「碧の宮は現在、窮地に立たされています。正体不明のウイルスが何処からか発生し、猛威を振るっているのです。」

そしてそのウイルスの猛威というのが、碧の宮に生息する人間以外の生き物に取り付いて凶暴的になる、ウイルス同士くっついて変な生き物になるなどして人間を襲い、碧の宮の人や町に甚大な被害が出てゐるらしい。

他にも奇病がはやった町や人々の心がすさみきって治安が乱れた町など、ウイルスの影響と疑われる事例も合わせて数えたら碧の宮全域にウイルスが何らかの形で潜んでいることになるという。

「このままでは碧の宮が滅びてしまいます。世界は全て繋がっている、それは貴方方の世界の終わりを意味するのです。」

真剣な雪路の表情と重い言葉に、九人の顔も固くなる。

「ウイルスは抗体か何かがあるのか、私達が退治や除去をしようとしてもびくともしません。私が占ったところ、碧の宮以外の世界に住んでいる人なら、ウイルスに打ち勝てると出ました。」

「……それで私達をここへ呼んだんですか？」

「はい。」

雪路が頷き、椎香達九人に頭を下げた。紫杏もそれに続く。

「お願いします、世界を救ってください！」

「ウイルス退治はきつと一筋縄ではいきません。危険もあるかもしれません。貴方方からしたら勝手な頼みでしょう。」

「それでも、どうしても貴方方でないといけないのです……！」

真剣な二人の様子に椎香達は文句も反論も出来ず、誰かが「分かった」と蚊の鳴くような声で呟いた。

「……なーんか、厄介なコトになったわよねえ。」

「本当だよな。俺なんてまだ半信半疑だぜ。」

あの後すぐ、雪路と紫杏は姿を消した。

彼女達は遠く離れた王宮からテレパシーのようなもので椎香達と会話をしていたらしい。

長い時間話は出来ないから、詳しい話を聞くためと具体的な作戦を練るために王宮のある王宮都市まで来てほしい、とのことだった。

「まあ、とりあえず自己紹介でもしない？ このメンバーでしばらく一緒にウイルス退治の旅なんですよ？」

彪砂がメンバーを見回し、言った。

「そだな、じゃあ俺から。えーと、緋風。16歳。特技は剣術……と、こんなモンか？ とにかくよろしくな！」

椎香より前に碧の宮に来ていた緋風。ショートカットに動きやすそうな服、腰には剣。

加えて素直そうな顔立ちをしていて、やはり椎香の印象は“RPGの主人公風”。

「じゃあアタシね。彪砂よ。16歳で、特技は舞踊。元いた世界じゃ人気の踊り子だったんだから。」

緋風の隣に座っている彪砂はメッシュのように一部だけ髪の色が違って肩や腕や足を露出していて、椎香は“ギャルっぽい”と感じた。

話し方はハキハキしていて、きりっとした顔立ちから気の強そうな印象を受ける。

「次、あんたよ。」

彪砂が反対側の隣に座っている椎香に言った。

「……椎香です。私も16歳。特技……は何だろう、歌かな？」

椎香は中学時代、三年間合唱部に所属していた。高校に入ってから友達と毎週のようにカラオケへ行っていたが、引越し後はそれも出来なくなっている。

「元いた世界では高校生……えっと、学校教育受けてた。はい、次どーぞ。」

椎香は隣に座る男性に順番をまわした。

「神冥だ。齢は19だが、元の世界では王をしている。」

ロングヘアに胴着のような格好が少しアンバランスな神冥はため息をつき、淡々と言った。

男前ではあるが怒ったようなその表情に、近づきたい印象を受ける。

そして隣に座る少年――表情と雰囲気以外は神冥をそのまま小さくしたような彼は、神冥とは対照的に元気よく自己紹介をした。

「俺は神詠、9歳！ 神冥の子供で、次の王様だ！」

「……へ？」

神冥と神詠以外の全員がほぼ同じ反応をした。19歳の男性の息子が9歳など有り得ない現象だというのは、どの世界でも共通なのだろう。

「しんめーがしんえーのパパなの？」

双子の1人が尋ね、神詠が「おう！」とはっきり答えた。一方、隣の神冥は難しい顔をしている。

「ほら、次はあんただよ。」

なにか訳ありの親子なのだろうと椎香は考える。他所の家の事情には首を突っ込まないでおくのが波風立てないコツだと、椎香は自己紹介の順番を双子達に回した。

「あ、うん。僕は露々、7歳。瑠々の弟！」

「あたしは瑠々、7歳。露々のお姉ちゃん！」

瑠々と露々は男女の双子なのに、顔も声も瓜二つ。違っているのは髪が長いか短いか、はいているのがズボンかスカートかぐらいだ。

「あ……羅歌、です。13歳で……家は代々続く魔法使いで、私は……まだ、見習いです。」

魔法使いというファンタジーな職業が現実存在する世界もあることに、内心椎香は関心を抱く。

美人だがおどおどした話し方で声も小さい羅歌は、気が弱く大人しい少女なのだと楽に想像できた。

「十和と申します。年は18歳、医者になるため学んでいます。」

眼鏡をかけ、チェックのワイシャツをさらっと着ている十和は真面目そうで、実際落ち着いていて言葉遣いも丁寧。

「さて、と……全員自己紹介したよな。じっとしててもしょうがねえし、行こうぜ。」

「行こうって……どこに？」

「あそこになんか集落っぽいのあるじゃん。」

緋風が指差した方を全員が見る。どこまでも広がる草原の向こうに、確かに建物の集まりが見える。

「とりあえずあそこ行って、王宮への行き方とか聞こうぜ。」

「うむ。」

「えー、ちょっと休憩してからにしない？ 疲れたしさ。」

緋風の意見に神冥が同意したが、彪砂は反対意見を唱える。

「でもさ、さっさと行ってさっさとウィルスの事片付ける方がよくないか？」

「俺も行きたいー！」

「えー、ちょっと…緋風も神詠も疲れてないわけ！？ 椎香と羅歌はどうなのよ。」

「え、私？」

傍観していた（というより、話に入る隙がなかった）椎香と羅歌は急に話を振られ、驚く。

「あ、あの…私…どちらでも…。」

「なによ、はっきり言えないの？」

気が弱い羅歌と気が強い彪砂という椎香の読みは間違っではないなかった。

「…私、彪砂に賛成。頭も混乱してるしさ、整理させてよ。」

「私も少し休息をとってからの方がいいと思いますね。」

“休憩派”が一人増えた。十和だ。

「無理は良くありません。小さい子や女性もいますし、休憩してか
らにしましょう。」

医者なだけあって、十和の言葉には説得力がある。空が赤くなってきたことと双子が眠そうにしていたのもあって、結局朝までここで休んでいくことになった。

「……それで、俺はその大会で優勝したんだぜ！」

「へーん、アタシなんか遠い町からファンがいっぱい来てくれたんだから。」

「へえ、2人とも若いのに凄いですねえ。」

——みんな、順応しすぎじゃないの？

緋風と彪砂、十和の三人がそれぞれが元々いた世界の話で盛り上がっている。

双子と神詠は隅でぐっすり眠り、神冥は火に薪をくべている。そんな“旅の仲間”達についていけず彼らの様子をぼうつと眺める椎香に、羅歌が遠慮がちに近寄ってきた。

「……みなさん、すごいですね。あつという間になじんでいるというか、状況を受け入れられるのが早いです……。」

「本当よね。」

どうやら羅歌も椎香と同じ心境らしい。他にすることのない椎香は、適当に相づちを打つ。

「……ウイルス退治って、どれぐらい期間がかかるんでしょう……。」

」

「さあねえ、見当もつかないわ。」

「…………元の生活に、戻れます、よね。」

ぽつりと呟かれた羅歌のその言葉に、椎香はここへ来て初めて元いた世界のことを思い出した。

東京のマンション…学校、友達……たまり場にしていた公園、カラオケボックス……そして、引越し先の田舎町、アパート……。
現実感がなさ過ぎるからか、それとも“別世界に行きたい”なんて考えていたからか。

戻りたい、という気持ちは彼女の中に沸いてこなかった。

第3話 リンディアにて

「そういえばさ。」

一行が旅のスタート地点から一番近い集落まであと少しでたどり着きそうな昼下がり、ふいに緋風が口を開いた。

「俺たちが異世界から来た…って、こここの世界の人に言っているのかな。」

第3話 リンディアにて

「なんで？ 別に言ってもいいんじゃない？」

「いろんな人に協力してもらえんじゃん。」

すかさず意見を言ったのは彪砂と神詠。

「でも、そんなの信じてもらえる？」

「そうですね、難しいかもしれませんが。」

椎香は当然のようにわいた疑問を投げかけ、十和も同意する。

「しあんに聞いたらわかるのにねー。」

はあはあ、と息を切らせ必死に歩きながら、瑠々が呟いた。

「本当ですね……。」

「……よんでみる？」

紫杏と雪路は前回、今後王宮都市へ来るまでに用事や困ったことが起こった時は椎香たちの誰かがどちらかを呼べば必ず現れる、と言いつ残した。

最初のように力を使って遠方の仲間と会話するのは一人だけならあまり力を消費しないから、少しの時間なら困った時に手助け出来る、と。

「でも……呼ぶたって、どうやって？」

「しあんー!!」

「って、そんなにいいのかよ！」

声を揃え口の横に手をあて適当な方向に叫んだ双子に、すかさず神詠が突っ込みを入れる。

「はい、お呼びでしょうか。」

……だが、無事に紫杏を呼び出すことができた。

「申し訳ありません、お伝えするのを忘れておりました。あなた方が異世界から来たことは、なるべく内密でお願いします。」

「いいけど、何でだ？」

「ウイルスを撒き散らす存在が何なのか、私達には全く分かりません。異世界から人が来た、と広まったら、彼らの耳にも入るかもしれない。」

「なるほどね……。」

誰が、何がウイルスを使って碧の宮を混乱させているのかが分からない。紫杏の懸念は全員が納得できた。

「唯一、各集落の長達には私の方から事情を説明していますので、町や村に入ったらその長に必ず会ってください。」

「分かった。」

「ごめんなさい、そろそろ時間なので……また……。」

声が聞き取りづらくなり、同時にジジ……と紫杏の姿にノイズのようなものが入った。

うつりの悪いビデオテープのようだと椎香が思った瞬間、紫杏の姿は完全に消えた。

「じゃあ分かった事だし、いざあそこへ！」

あそこ——森に囲まれた小さな集落へ、九人は入っていった。

「どうもどうも、遠い世界からご苦労様です。ここはリンディア、私は村長のイリアといえます。」

「初めまして。よろしくお願い致します。」

紫杏の言ったとおり、一行はまず集落の長を探し、面会へとこぎつけた。十和がイリアに頭を下げ、椎香達五人もそれに倣う。

イリアの部屋はそんなに広くなく、また全員分の椅子もないため、瑠々と露々、神詠、羅歌の四人は同席していない。

「雪路様のおられます王宮都市までは徒歩で1ヶ月以上かかりますし、ウイルス汚染も進んでいます。うちの村は小さいですが宿もあ

りますし食料や薬、狩りに使う武器もあります。必要なものは遠慮なく言ってくださいね。」

「ありがとうございます、助かります。」

「あんた達、見ない顔だね…。どこから来たんだい？」

ひとしきりイリアから話を聞いた後九人は三人ずつの三組に分かれ、今度は村の人から話を聞くことにした。

一人からの情報よりも五人、十人からの情報の方がより多方面から考えることができ、様々なことが分かるという十和の発案で。

「あんた…：…だと？ 貴様、この私に向かって——」

「ち、ちょっと神冥！！」

「すみません、彼今機嫌が悪くて。」

通りすがりの中年女性の何気ない一言に怒りをあらわにしそうになった神冥を、慌てて椎香と十和が誤魔化す。

椎香達に対してもそうだが、神冥は元の世界で王の座についているだけあって常に他者より自分が偉い、という前提の上から目線。

「ちょっと！」

十和が女性に説明し話を聞く間（椎香達は王宮都市の人間で、各地でウイルスの研究をしている、ということになっている）、小声で椎香は神冥に注意する。

「……何だ。」

（ああ、本当に不機嫌だ。もう嫌だ、この人。）

「さっきも言ったじゃない。あなたが王様なのは、あなたの世界の話でしょ！」

「……うむ。」

「ウイルス退治はこの世界の人に協力してもらわないといけないんだから、嫌な印象植え付けないでよ。“あいつ嫌な奴”って思われたら協力してもらいにくくなるでしょ？」

「全く、何故私がこのような事を……。」

“何故私が――。”それは、椎香もおそらく他のメンバーも、ずっと考えていること。

“小説みたいに異世界にトリップしたい”という、数日前の無責任な自分の意思をふと思い出した。

「仕方のない。早く片付けて戻るためだ、我慢してやろう。」

まだ不満は残っているようだが、とりあえず神冥も嫌々納得したらしい。

「どうもありがとうございました。」

「いえいえ。大変だろうけど頑張るんだよ。」

話が終わったらしく十和が礼をし、女性が手を振って去っていった。

「二人とも、ウイルスの事が少し分かりましたよ。」
「どんな？」

「リンディア周辺での被害は農作物を荒らす、力の弱い子供やお年寄りに怪我をさせる等ですね。この辺りしか生息していない“ラッシャ”という動物に感染しているそうです。」

「ラッシャとはどのような見た目なのだ？」

「白くて耳が長い、普通は温厚な動物だそうです。」

白くて耳が長い、温厚な動物——椎香はウサギを思い浮かべたが、人間に襲い掛かる姿まではどうも想像できない。

「あー、いた！」

「とわー、しいかー、しんめー！」

「緋凧と彪砂が、作戦会議するってよー！」

瑠々、露々、神詠という子供トリオの大きな声が聞こえた。

「みなさんもある程度情報を仕入れたようですね、行きましようか。」

「

……ひょっとしたらこれは全部夢かも、なんてことを椎香はこの世界に来てから何度も思ったが、そんな現実逃避はいよいよ許されなくなってきた。

「みんな逃げろ！ ウイルス汚染されたラッシャが出たぞ！」

作戦会議をしようとした矢先、例のラッシャが現れたリンディアの中心部に現れた。

第4話 VS ラッシャ

——ありえない。ものすごくありえない。

いや、あの朝時間が止まった時からありえないことの連続だけど。
今のこの状況、最上級でありえない。

第4話 VS ラッシャ

「うわっ！」

「きゃあ！」

ペットショップのウサギのような見た目をしたラッシャが、手近なところにいる村人に襲い掛かった。

襲い掛かられた10歳前後の少年と姉らしき少女が必死で逃げる。

「みんな、家に入りなさい！」

イリアは二人を庇いながら、他の村人にも大声で叫ぶ。なんとか少年達は家の中へ逃げ込むことに成功し、椎香達とイリアは畑脇の小屋の陰へ隠れた。

「ああ、いつもよりウイルスの症状が重いみたいだ。」

たまたま収穫し終えた後なのか畑に作物は少なく、そのためかラッシャの獰猛な瞳は獲物——椎香達を探している。

「イリアさん、あれどうやったら倒すなりウイルスぶっ飛ばすなり出来るんですか!？」

「恐らく…攻撃したりしてラッシャの身体を弱らせたらかの対策がとれるはずです。後は紫杏殿でないと分かりませんが。」

「よし、なら俺が何とか時間稼ぐから、誰か紫杏呼んで対策聞いてくれ!」

「ちよっ…：緋風!? あんなのと戦う気!？」

迷わずそういつて立ち上がった緋風の服の裾を椎香は思わずつかんで止める。

彼女が想像していたのよりも本物のラッシャはずっと恐ろしい。

鎌のような大きくて長い爪と牙が、遠いところからでも良く分かる。もし、引っかかれたり咬まれたりしたら——椎香の背筋に悪寒が走る。

「だって、紫杏が俺たちしか無理だって言ってただろ!」

椎香の手を払って言いながら、緋風はあっという間に腰の剣を鞘を抜かずに構える。

「戦えねーなら下がってろ!」

「ひなっ……」

緋風がラッシャに向かって走り出した瞬間、ラッシャは素早くその場を離れた。

「なっ…!」

「ひっ…!」

そしてそのままの速さで一気に椎香の目の前まで来た。全員が隠れ

ていた場所から、緋風を止めようとしていた椎香だけが出ていたからか。

何が起こったのかすぐに理解できず呆然としている椎香に向かってラッシャは爪を構えて――

「しいかー!!」

「椎香さんっ！ ええいっ！」

瑠々と羅歌の声、それと変な音が椎香の耳に入って来た次の瞬間、ラッシャの周りに小さい雲のようなものが現れた。

同時に彪砂が椎香の腕を強く引っ張り、ラッシャから体を離れた。

「椎香、こっち！ もー、びっくりしたわよ！ 襲われかけるんだもん！」

「彪砂……。」

「すごいね、らか！ あの雲は魔法なの？」

「は、はい。小黒雲しょうこくうんといって、少しの間目くらましになるんです。」

「便利ねー…ってそんな場合じゃないわ！ 紫杏ー！」

「はい。」

あさつての方向に向かって彪砂が名前を呼ぶと、紫杏の姿がすぐに現れた。

「紫杏、ウイルス汚染された生き物が出て来ました。対処法を！」

「生き物に寄生したウイルスの場合は、まずその生き物を攻撃するなり眠らせるなりして、ウイルスにとって“使えない状態”にしてください。そうすればウイルスは自分から離れるので、あとはウイルスそのものに攻撃して消してください。」

「分かったわ！ 緋風、私も加勢するわよ！」

緋風はラッシャに追いつき、すでに剣によるみね打ちを始めていた。ラッシャも負けじと爪で応戦する。

そこにその辺の棒を持った彪砂も加勢して、ふたりがかりでラッシャを殴り続ける。

そうしなければならない。そうしなければ、こちらが一方的にやられてしまう。

頭では理解していても見ていて気持ちのいいものではなく、椎香は顔を背ける。

「ギャンッ！！」

「うわっ、なんか出た！」

「うげっ、気色悪う。」

弱ったラッシャの身体から、黒っぽくおどろおどろしい、気体・固体・液体が気持ち悪く混ざり合ったような物体が出てきた。

おそらくこれがウイルスの本体だろう。ラッシャはその場に倒れこみ、今度はこっちの物体が緋風たちに向かってくる。

「かかれっ！！」

緋風の指示を合図に、彪砂と神詠が緋風と一緒にウイルスを殴る、蹴る。

ウイルスの方も負けじと体当たりや噛みつき攻撃で反撃をしている。その輪から離れたところに椎香は十和や羅歌達と戦闘の様子を見ていたが、その表情はこわばり固まっている。

それまでは、まるでRPGか小説のようだとどこか他人事にこの“碧の宮”を捉えていたが、目の前の戦闘はRPGでも小説でもなく、自分の身に攻撃が向かってきた。

現代日本に生まれた都会っ子の椎香は人間同士の殴り合いすらテレビドラマで見たイメージしか持っておらず、ましてや相手は得体の知れないウイルスなんて――

――怖い。嫌だ、こんな世界。

「でやっ！」

緋風のとどめの一刺しでウイルスは消え、砂のようになって散った。

「疲れた〜っ。」

「いてて。十和、怪我の治療出来る？」

「薬などがあれば出来ますが、ロシアが優先ですよ。」

「えーっ。」

「ウイルスが離れた今、無害な小動物なんですから。ウイルスついでになぶり殺したとあっては後味が悪いでしょう？」

……信じられない。あんなこととして、目の前でそれを見て、みんなどうして平然としてるの。

ウイルスとはいえひとつの生き物を殺した緋風・神詠・彪砂、その光景を目の前で見ていた十和・羅歌・神冥・瑠々・露々。

全員が何事もなかったように平然としている目の前の光景が、椎香には信じられない。

「椎香さん…？ 顔色が悪いですよ？ 大丈夫ですか？」

羅歌が恐る恐る尋ねる。彼女もラッシャとの戦闘に対しては平気そうで、弱々しそうなくせに凶太いのかと椎香は心の中で悪態をつく。

——何だよ。こんなに気にしてるのって私だけ？ 私が変なの？
みんなが変なの？ この世界が変なの？

「…大丈夫な訳ないでしょ。」

頭がぐるぐる混乱して止まらない。せきを切ったように椎香は怒鳴った。

「なんでみんな平気なのよ！ ウイルス怖くないの？ ラッシャバこぼこにして、それ目の前で見て、何にも感じないの！？」

「椎香？」

「椎香さん？」

「……私、帰る。こんなに怖い思いする位なら元の世界のつまんなさの方が100倍マシよ！」

言いたい事を言うだけ言い、椎香は呼び止める声も聞かずにリンディアを逃げるようにして走り去った。

第5話 100%信じることも疑うことも難しい

——こんな怖い、得体の知れない世界は嫌。帰る。絶対帰る。
世界が滅びる云々の話が本当でも、どうなろうともう知らない。

第5話 100%信じることも疑うことも難しい

「椎香！ 椎香、待ってください！」

聞き覚えのある声に、椎香は思わず走るスピードを緩めた。その瞬間を逃さず、彼女の前に回ってきたのは。

「雪路……。 」

「やっと止まってくれましたね…。 」

「……実体じゃないのに、追いかけてたり出来んのね。 」

「は、はい。 」

走っているときは意識しなかったが息があがっている。足も疲れた。走りつづけても意味がないと知った椎香は、木陰に腰掛けた。

「……椎香。皆様に呼び出され、話を聞いてきました。 」

「なら話速いわ。私を帰して。 」

雪路は椎香たちをここへ連れてきた。だったら元の世界に戻すことも容易いのだろうと考えたが。

「…それは出来ません。」

「は？ それってどういう――」

即答した雪路に対して椎香は怪訝な顔で文句を言いかけた、が遮られた。

「椎香、ここに来る前に自分以外の時間が止まったことを覚えていますか？」

「……それが何？」

「あれは、私と紫杏が二人がかりで行ったものです。あなた達がこちらの世界でウイルス退治をしている間、それぞれの元の世界で“人間が人知れず消えた”と騒ぎになっては大変なので。ウイルス問題が完全に解決するまで時間は動かせないように設定しています。」

「…なによそれ！」

椎香の苛立ちは怒りに変わった。平手の一発でも食らわせようと手を上げるが、椎香の手は雪路の“映像”をすり抜ける。

「ふざけないでよ。私はこの世界と無関係なのに、あんたにどうして私をここに縛り付ける権利があるの？」

「……ごめんなさい。ですが椎香達でないと駄目で……」

「この間もそれは聞いたわよ。だけでもしこの世界で私やみんながウイルスで死んだら？ あんた責任取れるの？」

最初はそんなことを考えていなかった。ラッシャと戦うまでは。

「どうせ知ってるんでしょ。あの時、もし羅歌が雲を出すのが遅れたら？ 私が逃げ遅れて、あの大きい鋭い爪で引っかかれたら？ ウイルス退治は、常にそんな危険が伴うわけ？」

「死なせません、絶対です。」

「…ずいぶん無責任に言い切ってくれるわね。」

「絶対に死なないうよう、椎香のことは私の姉様を守ってくれます。」

椎香の不機嫌な怒りの表情に、さらに怪訝さが加わった。

「姉様？ どこにいるってのよ。」

「…今はまだ姉様の姿は椎香にも私にも見えません。ですが、いつも椎香のすぐそばにいるのです。」

「…何それ、意味分かんない。」

「…信じてください、椎香。」

ためいきをつきそっぽを向く椎香を、雪路はまっすぐに見ている。
こんな戯言、無視しちゃえばいい。雪路を脅して元の世界に帰してもらえばいい。

ウイルス問題が解決するまで帰れないなら、どこか安全な場所に隠れてればいい。

椎香の頭にずるい考えが浮かぶたび、無意識に“それは駄目”と却下する。まるで彼女の内に、もう一人の自分がいるみたいに。

「椎香、聞いてください。私達はあなた方を呼べる状態になるのをずっと待っていました。」

椎香はは雪路の言葉を相づちを打たずに聞く。だが、顔だけは雪路のほうへ向けた。

「早く手を打たないとウイルスはどんどん増える、あなた方を呼び出すまでの手順に少しの失敗も許されない。確かに、この方法は一

番危険です。ですがこれが唯一世界を救える方法なんです。」

「……世界世界言われても、少なくとも私のいた日本は平和だったんだから、信じてろって方が難しいのよ。」

「分かっています。でも、椎香。あなたでないといけない。あなた方だけが、ウイルスに立ち向かえるのです。」

「なんで私達なの？ “世界”には他にもたくさん人間がいるじゃない。」

——そう。わざわざ私なんかを呼ばなくても、強い人間も素直で扱いやすい人間もたくさんいる。私じゃなくても。

「それは椎香こそが私の姉様に守られた、いわば“碧の宮の人間と一心同体の状態にある”人間だからです。」

「一心……同体？」

「ええ、ちなみに他の皆様も同じ、碧の宮の人間と一心同体なのです。だからこそ抵抗無くこの世界に来れた。碧の宮とまったく無関係の人間なら、ウイルス退治以前に無事に世界を越えられるかどうかもう危ないんです。」

「……根拠は？」

「私と姉様は双子の姉妹で、同じ顔をしています。私と椎香も同じ顔をしているでしょう？ 根拠としては弱いですが……。」

「……………」

確かに弱いし、すぐには信じられない。突拍子もない説明なのには変わりはない。

だけど、椎香はどうしても完全に嘘だと決めつけることができない。それは雪路の表情が真剣だからか、それとも……本当に雪路の姉様と椎香が一心同体の関係にあるからだろうか。

「……………分かったわよ。」

「椎香？」

「…みんなの所に戻るわ。迷惑かけて悪かった。」

どうせもう、どんなに目や耳を塞いで否定したって、自分もこの「ウィルス退治物語」の登場人物になってしまっているんだろう。半ば諦め、せいぜい早く終わることを祈りながら立ち上がる。

「その代わり、本当に死んだら末代まで呪うからね。」

「椎香……ありがとうございます。」

時間がきたらしく、雪路の姿がだんだん薄らいでいく。

「椎香ーっ！」

「しーかー、だいじょーぶー!？」

ふと後ろから聞こえてきた声に振り向くと、緋風や瑠々たちが椎香たちのいる方へ向かって来ている。

「皆様、椎香を心配して来たのですね。すっかり仲良くなられて。」
「……。」

肯定も否定もする気にならず、椎香は雪路に背を向ける。

「…椎香、またお話ししようね。」

最後に聞こえたその言葉にもう一度雪路を見ると、少し寂しそうに微笑みながら消えていった。

“姉様”とやらの面影か何かを、自分の中に見ていたのだろうか。そう思いつつ、椎香は仲間のほうへ歩き出した。

第6話 それぞれの世界、私達の違い

「えーと、心配かけてごめん…。」

椎香は合流後、緋風や彪砂に一人で叫んで走って行って驚いたし心配したと怒られた。

また、その時空はすでに赤くなっていて、宿を提供すると言ってくれたイリアの厚意に甘えて一泊していくことになった。

第6話 それぞれの世界、私達の違い

各々夕食と風呂を終えた後、今後のことを改めて話し合おうと十和の提案で全員が集まった。

「いい機会ですから、一人一人それぞれが元いた世界の話をしておきませんか？」

まず口を開いたのは言いだしっぺの十和。

「それぞれの世界のこと？」

「ええ。」

十和は一人一人を見回して頷き、話を続ける。

「私達はみんな違う世界から集められました。当然価値観や文化の違いもあるでしょう。そういったことをあらかじめお互い分かっていたほうがこの先混乱も起きにくいと思います。」

「違いったって、具体的にはどんなんだ？」

真っ先に疑問を口にするのは緋風。

「例えば、今日の椎香さん。突然逃げ出してしまった理由、よく分からなかった人と分かった人がいると思います。簡単にでいいのでいきなり逃げたくなった理由を教えてくださいいただけますか？」

急に自分に話が振られるとは思っていなかったのだろう、椎香は少し驚いたが、後半の言葉を聞いて納得したようだ。ふう、と息を吐いてから話し出した。

「だからさ、怖くなったの。ラッシャに襲われそうになったことや……ウイルスに平気で攻撃する緋風たちも。」

一瞬言っていることなのか迷った。だが正直に言う。

どうせこのウイルス退治に参加せざるを得ないのだから、十和の言う通りなるべく今後は混乱が起らないようにしたい。

そのためには自分の意見や気持ちを、面倒でも伝えなければいけない。

「なんでだよ、あれは攻撃しないといけない状況だっただろ！」

すかさず緋風が反論する。

「そりゃ私だって今は理解してるけど……生き物攻撃するのを目の前で初めて見たんだから、怖くなってもしょうがないじゃない。」

「待って。全く初めてだったの？ 椎香の世界では野生の動物に襲われたり、食べるために狩りしたりしなかったワケ？」

「なかったよ……彪砂の世界ではあったの？」

野生動物に襲われるなど、椎香の世界ではテレビで聞く程度：それも山奥の熊だとかアフリカの何とやらだとか、彼女の日常には存在しない。

ましてや狩りなど、“縄文時代の人々の暮らし”くらいしか連想出来ない。

「何言ってるの、アタシの周りじゃしょっちゅうよ。村では自給自足で生きてて、晩のおかずを狩りに山に入った人が反対に殺されたり。」

「うわ……。」

あっさり彪砂が言い放ったえげつない例えには椎香だけでなく神冥や羅歌も表情をゆがませる。

「戦争もあるしな。他の世界がどうかは知らねーけど、俺は駆り出されたこともあるぞ。殺さないところちが殺される状況だったな。」

またもやあっさり言ったのは緋風。戦争も椎香には遠い昔や別の国の出来事でしかなく、イメージがわからない。

「ボクらは多分、しーかと一緒だよ。叩いたりやつつけたりするの、テレビとかでしか見たことないし。」

「だから、あたしたちもホントはさっきちょっと怖かったの。」
「そうなの……。」

それでも溜々も露々も、椎香と違って取り乱すことも逃げ出すこともなかった。

……自分の行動を、初めて少し情けなく思った。

「ほらね、こんなに違いがあるのですから。今の会話で緋風君や彪砂さんは戦い慣れていること、逆に椎香さんと瑠々ちゃん、露々君は苦手と分かったでしょう。ウイルス退治の戦闘の時に役割分担をしやすいですよ。」

十和はここまでの会話から既に戦略を立て始めたようだ。冷静で頭の良い印象に違わないのは医者という職業も関係しているのだろうか。

「十和の言う通りだよな！ 次からは俺や彪砂と……あと神冥と神詠あたりが最前線で戦ってさ、残りの奴らは後方支援でいいんじゃない？」

「そういえば、ラッシャとの戦いでは神詠も頑張ってたっけ。」

「まあな！ 王様には強さが必要だから、俺や父さんは元の世界で武道をやっているんだ！」

「ひょっとして、その服……。」

「…ああ、稽古中に私達はこの世界へ連れて来られた。」

神冥と神詠が着ている服は、椎香の世界にある柔道や空手の胴着に似ている。

王のわりに庶民的な服装をしているのにはそのような訳があったのか、と妙に納得する。

「ひなぎー、 “こーほーしえん” って何？」

「ん？ うーん、俺達が戦いやすいようにサポートしてくれたりいいんだよ。何か出来そうか…？ つっても色々あるからな……。瑠々と露々さ、何か得意な事ってあるのか？ ウイルス退治に役立ちそうなの。」

「とくいなこと？」

質問がざっくりしている上先ほど二人とも元の世界で戦う機会は無かったって言っていたのに、答えられるのだろうか。瑠々と露々は同じ表情で考え込み、同時に口を開いた。

「……動物のきもちが分かるのは？」
「えっ？」

思ってもいなかった種類の答えが出てきて、全員が一斉に二人に注目する。

「あたしたち、小さいときからいろんな動物の思っていることが分かるの。痛いとか、楽しいとか。」
「へー。おもしろそうだな、それ。」

犬のように感情が素直に表に出る動物ばかりではないだろう。意外な特技に椎香たちは感心する。

「今日も…ね、露々。」
「うん。ラッシャのきもちも、ちょっとだけ分かった。痛い、でもウィルスいる方がいや、って聞こえてきたの。」
「だからね、がんばれーって言ったの。こっちの世界でも出来るって知って、ちょっとびっくりした。」

「あんた達の気持ちも伝えられるわけ！？ 凄いじゃん！」

彪砂の率直な褒め言葉を聞いた二人は、何故だかすごくきょとんと………というよりも“信じられない”と言いたげな顔になった。

「……………すごいのか？」
「凄いわよ、ねえ！」

「はい、動物にウイルスが寄生している間も動物そのものの意識はあることや、それと意志疎通が可能だと分かりました。ウイルスを追いつめるため“本体”に弱点を教えてもらうなどの協力なども望めるかもしれませんがね。」

「すっげー！ 溜々に露々、お前らめっちゃくちゃ重要な役割だぞ！」

「……ホントに？」

「ホントだって！ 戦闘もやりやすくなるし、その辺歩いている動物にもウイルスの情報とか聞けんじゃん！」

十和の分かりやすい解説や、彪砂と神詠の褒めつぷりを聞いた溜々と露々は——いきなり泣き出した。

「つて、ええ！？ ちょっとどうしたの！？」

「溜々、露々？」

いきなり目の前で泣かれた仲間たちは当然驚き、困惑する。

「ご、ごめんね。ボクたち、びっくりしたの。」

しゃくりあげて、鼻をすすって、それでも一生懸命二人は涙の理由を話す。

「前の世界では動物と話せるってともだちとかに言ったら、へ、へんって言われて。おかしいって。」

「動物とはなしが出来る人、ほかにいないから。だから、あた、あたまがおかしいって、大人のひとも。」

7歳の子どもに、そんなことを言うなんて——。椎香の眉間にしわが寄る。

「だから、みんながへんって言わなくてほめてくれたの、びっくりして。」

「すごくうれしかったの。この力をほめてもらえたの、パパとママ以外ははじめてだったの。」

「……そうだったのですか。」

その後、双子が泣き疲れて眠ったのを合図にその日は解散、椎香たち女子は部屋に引き上げた。

「溜々と露々、すごいわね。こんなに小さいのに周りの人の無理解に耐えてきたのかしらね。」

「本当、すごいですよね……。今日、役に立てることがわかって嬉しかったでしょうね。」

「どこの世界にも意地の悪い人っているのねー。この子達偉いわ、本当。」

溜々をおぶった彪砂の言葉に、羅歌も椎香も同意する。

「しかし、本当重要な力よね。後方支援組では羅歌は魔法よね？」

「あ、あの……あまりお役に立てないかもしれませんが……。」

「で、椎香は？」

「……私？」

双子は動物との意思疎通、羅歌は魔法、十和は怪我の治療などだろう。皆それぞれに出来そうなのがある。

——私——？

第7話 神冥と神詠

リンディアを出た一行は、とりあえずこの近くにあるという別の町を目指すことになった。

だがイリアの話によるとその町は高めの山の中にあるという。

第7話 神冥と神詠

「あーもう、また出たわ！ ウイルス汚染された動物！」

「さっきウイルスを取り除いた猫耳鳥の言っていた通りですね……。

」

そして、彼らが町を目指し登っている山の中はウイルス地獄。

多種多様な山の動物達が短期間で次から次へとウイルスに汚染されていったと、瑠々と露々が先ほどの戦闘後正気に戻った猫耳鳥から聞き出した。

「コイツ、まだ戦ったことないよな？ 瑠々に露々、頑張ってコイツの声聞いてくれ！」

「うん！」

緋風、彪砂、神冥、神詠の四人が最前線でいつでも攻撃出来る体制に入った。

瑠々と露々は意識をウイルスの向こうにある動物そのものの声に集中させる。

十和も羅歌も、すぐに動けるよう準備をした。リンディアで決めた戦闘時の役割分担は、回を重ねて少しずつ板についてきているよう

だ。

そんな中、椎香の役目は――荷物番兼道具係、ようするに“非戦闘員”。

一番敵から遠い位置にいるこの状況を、彼女は他の仲間が悪いと思いつつも楽だと感じていた。

「わかったー！」

「このコ、耳が小さくてあんまり聞こえないから目がすごく大事ななんだって。」

今日の前にいる汚染動物は、顔に対する目の範囲が大きく、その代わり耳は正面からだともったく分らない。

二本足で立つそれはウイルスの影響なのか、今にも最前線にいる四人の誰かに襲いかかろうと大きな目を血走らせている。

「よし、じゃあ目を潰せば……」

「ストップ！ 緋風、あんたウイルス追い出した後の動物のことを考えなさいよね！」

「あ、そうか……。」

「羅歌、あれ出して！ 小黒雲！」

「は、はい！」

目をつぶせば確かにウイルスはすぐに出てくるだろうが、この生き物に今後一生盲目で生きていかせるのは良心が痛む。

それに引き換え、リンディアで羅歌が椎香を守るときに使った小黒雲なら十分めくらましになる。

「えいっ！！」

……だが、音をたてて羅歌の手の平から吹き出たそれは黒くもなければ大量でもなくて、せいぜい“濁ったわたあめ”だった。

「羅歌、あんたそんな何度も失敗してんじゃないわよー！」

「ごめんなさいごめんなさい！」

魔法使いといえど見習いらしい羅歌は今みたいな失敗も少なくないことが、一緒に戦闘を重ねてきたメンバーにも分かってきた。そうこうしている内に向こうが狙いを羅歌と彪砂の二人に合わせ、全体を見れる位置にいる椎香はいち早くそれに気が付いた。

「羅歌、彪砂！ 後ろ気をつけて！」

だが、椎香がとっさに叫んで二人が後ろを振り向いた時には、神詠が地面の砂を相手の目にぶつけていた。

間髪入れず、目が見えにくくなった相手に神冥が強い蹴りを入れる。

「ギャウン！！」

すぐに動物の身体から出て来たウィルスを神冥が容赦なく蹴って殴って、あっという間に倒した。

「神冥ってば強いわねー。」

「本当だぜ、俺らの出る幕無かったよな。」

「お前達もたまたまし過ぎておるのだ、もう少し手早く事を済ませられぬのか。」

「い、ごめんなさい。」

責めるような神冥の口調に、羅歌が泣きそうな表情になる。

「ちょっと神冥、言い方考えなよ。羅歌もまだ戦い慣れてないんだからさ。」

椎香は羅歌を庇い、神冥をたしなめる。

神冥が元の世界で王であるが故の偉そうな態度に、椎香は嫌気がさしていた。

実際偉いのだろうが、何しろみんなと協力しよう、助け合おうという意思が全く見られない。

自分に少しでも意見されるのが嫌なのか、今も椎香の一言で一氣に不機嫌になった。

——なんかムカつく。もう少しだけ言ってやれ。

そんな考えが芽生えた椎香はわざと大きくため息をついて、言った。

「あーあ、神詠はあんたみたいに偉ぶってなくて素直なのに。息子を少しは見習ったら…」

「何を言うか!!」

椎香が言い終わるか終わらないかの内に神冥は怒鳴って、神詠を指差して強い口調で言った。

「それは出来損ないのモノだ！ 処分して新しく作らねばと思っていたものを……よもや私より優れておるなどと……！」

——は？

当事者親子以外の全員が耳を疑った。

——この人は何を言ったの？ 自分の息子を何て言ったの？

呆然としている椎香達にも神詠にも目をくれず、神冥は顔を背けて歩き出した。

「神冥、どこ行くの！？」

「気分が悪い、散歩だ。」

「何なの、あの人……………」

全員の視線が無意識に残された神詠へと集まる。

泣くでも驚くでもショックを受けたようでもなく、ただ無表情で神冥が去った方を見る神詠。

そんな九歳児の姿に椎香は同情よりも違和感を感じた。

「しんえー、大丈夫？」

瑠々が神詠の側に寄って行って尋ねる。

「しんえー、”できそこない”って何？」

露々も瑠々の反対側に寄っていき、椎香達には聞きづらいようなことをあっさりと尋ねた。

「んーと……まあ、俺は出来の悪い子供だから。父さんは自分みたいに優秀で冷静な子供がほしかったんだってさ。」

「そんな、出来の悪いなんて……………」

「だからって、あの言い方は無いわよ！ “処分”なんて、モノじゃあるまいし……。」

怒りながら彪砂は自分が神冥と同じ言葉を使ったことに気が付いた――“モノ”。

「なによ……神冥は神詠を……自分の息子を“モノ”だと思っているってこと？」

「彪砂さん！ 神詠君の前でそんな……。」

「いいんだ。……俺は本当に失敗作なんだよ。王様は代々即位してすぐに、自分の遺伝子をコピーして自分と全く同じ能力や性格を持った赤ん坊を作るんだ。その赤ん坊が世継ぎになる。」

コピーされ人工的に作られた、コピー元と全く同じ――年齢だけが違う“いのち”。

椎香の世界で“クローン”と呼ばれている技術に近い。それが神詠――。

「おかあさんのおなかから赤ちゃんが生まれるんじゃないの？」

「そ。俺もそうやって作られたけど、五年経って九年経って、どうも父さんとは全然違った性格してる。九歳のときの父さんが出来たのに、俺には出来ないこともいっぱいある。だから失敗作ってわけ。」

「ですが、神詠君……。」

「いいんだよ。父さんは悪くない。」

神詠を氣遣うような十和の言葉を、神詠本人が遮った。

「俺が父さんみたいになれないのが悪いんだ。だから父さんを責めないで。……俺も散歩！」

椎香達に言葉を挟む隙を与えないくらい一方的にまくし立てて、神詠は神冥が行った方と逆へ走っていった。

「あ、神詠……。」

そこは木が特に集中していて、器用に掻き分けていく神詠の姿はすぐに見えなくなった。

「……ねえ、露々。」

「うん、溜々。」

「溜々、露々？」

双子は互いに何かを呟き合い、ぎゅっと手を繋いだ。

隣にいた椎香がその行動に気が付いた瞬間。

「あたしたち、行ってくる！」

溜々と露々はそのまま、神詠が消えた方へ走っていった。

「溜々、露々!？」

「ど、どうしよう……。」「

「溜々と露々、神詠を追いかけて行ったんだな。待っていた方がいいのか……。」「

「だけど、まだこの辺りはウイルスが残ってるでしょ？ やっぱ子供だけだと心配よ。」

「そうだよな、神冥も戻ってこないし……。なあ、手分けして追いかけようぜ。」

緋風の呼びかけに他のメンバーも頷く。

入れ違いになる可能性を考え十和をその場に残し、椎香と彪砂は神冥を、緋風と羅歌は神詠達三人を探しに行った。

第8話 苦しい親と悲しい子

『……これが私から出来た赤ん坊か。かわいいな。』

“出来た”ばかりの神詠をそうっと抱き上げ、幼い神冥が微笑む。

『本当に私と同じ顔をしておるのだな！』

『ほほ、当然でございます。あなたさまの遺伝子を全くコピーして作られた世継ぎ様ですから。』

『ああ、私はこの子を立派な未来の王に育ててみせるぞ！』

第8話 苦しい親と悲しい子

出来損ない、と目の前ではっきり言われた。

城にいる父親の側近達の聞こえよがしな陰口や使用人の噂話でしか聞いたことのなかったその言葉は、時間が経つほど神詠の心に重くのしかかる。

父親が自分を嫌っていることは態度で分かっていたとは言え、シヨツクじゃなかったと言えば嘘になる。

——ねえ、俺はどうすればいい？

心の中での問いかけに答えるものは何もない。だが、その代わり。

「しんえーだ。」

「見いつけた。」

突然後ろから幼い声で名前を呼ばれた。予期していなかったため、驚いて振り向く。

「……何だよ、お前らか。」

「あはは、しんえーってばびっくりしすぎだよー。」

「露々笑いすぎ！ ごめんね、しんえー。」

驚いた神詠の様子が可笑しかったらしく露々がけらけらと笑い、瑠々は露々を注意して軽く謝った。

「露々、お前なあ！ 後ろからいきなり呼ばれりゃびっくりしてもしょうがねえだろ！」

「だって、しんえーが心配だったから。」

露々の言葉に、神詠が真顔になる。

「ねえしんえー、しんめーと仲直りしようよ。」

神冥と神詠の親子仲が悪いことは幼い二人にも理解出来た。だが、なぜ神冥は神詠を嫌うのか、なぜ神詠はそれを甘んじているのか。

「しんめーはしんえーのお父さんでしょ？ 仲良しじゃないなんてさみしいよ。」

素直な感想を口にする自分より小さな二人が羨ましく、今はその存在が少し疎ましい。

瑠々と露々の場合は両親が二人にとってほぼ唯一安心出来る存在であるから尚更――

「ガキには分かんねえよ。」

「しんえーだってガキじゃん。」

「とわが言ってたでしょ、“分かんないことは教え合った方が旅をしやすい”って。」

「……それとこれとは別だって。」

神詠は口ではそう言うが、その表情は今にも泣き出しそうに見える。

「しんえー、しゃべっていいよ。ここはしんめーやしんえーのいた世界じゃないよ。」

「しんめーは今いないよ。だから何をしゃべっても、今は怒られないよ。ナイシヨにしとくから。」

自分の抱えている気持ちを言っている。

都合が悪いならここだけの話にする。だから話してほしい。

言葉足らずでも、双子の心配する気持ちはまっすぐ神詠に届いた。

「……どうすればいいのかな。俺はどうすれば嫌われないのかな。」

我慢し続けていた気持ちが言葉となって、やはり我慢していた涙と共に少しずつ溢れ出す。

「言葉遣い直そうとしても、武道や勉強頑張っても、父さんは俺のこと好きになってくれない……。」

最後の方は、涙声になっていた。

——奴はいつもそうだ。私の苦勞も何も知らずに……。
本当に“作り直せば”、この苦しみから私は逃れられるのだろうか。

「神冥ー！ 神冥、どこー？」

静まり返っていた空間に、突然自分の名を呼ぶ声が入ってきた。
それが椎香の声だと気付いた神冥は、今見つかったら説教してきそうで面倒だと声から離れた…が。

「あら、いた。椎香ー、神冥見つけたわよー！」
「なっ……。」

椎香から離れようと立ち上がって一歩進んだ瞬間、木によって出来ていた死角から彪砂が現れあっさり見つかった。

「一体何をしに来た。」

「あんたを探しに来たに決まってるでしょうが。」

不機嫌な様子で二人と目を合わそうとしない神冥、そんな神冥をまっすぐ見上げる彪砂。

「ねえ神冥、神詠にさっきのこと謝ったら？ 事情は知らないけど、あそこまでのことないじゃない。」

「お前達に関係ないだろう。」

彪砂が説得を試みるが、神冥は聞く耳を持たない。

——確かに、関係ないっちゃあないのよね。

椎香はここまで来たものの、神冥を説得する必要があるのか——ふと思った。

成り行きで一緒に旅をすることになったとはいえ、所詮は他人。

他人のプライバシーにあれこれ関わっても良いことはない知っているし、第一面倒くさい。

人に何か言われたらすぐ不機嫌になる神冥を説得なんて無理——と思っ
ていても、それを彪砂に言うのも憚られるため、成り行きを見
守る役に徹することにした。

「関係なくないわよ。一緒に旅をする仲間が親子喧嘩しているなん
て居心地悪いんだから。第一、神詠が可哀相よ。」

彪砂の言葉で、九歳にして何かを諦めたような神詠の寂しそうな表
情をふと思い出す。

「あれが出来損ないに育ったのは私のせいだと言うのか！」

「そんな事言っていないでしょ！　ていうか、出来損ないって言い方
もやめなさいよ！」

「出来損ないは出来損ないだろう、奴は私とは違うモノになってし
まったのだから！」

神冥のその言葉に、彪砂は怒りのあまりつかみ掛かろうとした——
が。

「……あんた、さっきから何言ってるの？」

パン、と鳴った小さな音は椎香の手が神冥の頬を叩いたもの。
言い合いに今まで参加していなかった椎香の突然の行動に、神冥も

彪砂も思わず怯んだ。

「黙って聞いてりゃ随分と自分勝手よね。神詠が全部悪いみたいじゃない。あんたが全部悪いとも言わないけど、神詠にもどうしようも無いことだってあるでしょうが！」

「椎香……。」

椎香はまっすぐ神冥を睨みつけ、声を震わせ訴える。

「あんた親なんでしょ？ 歳が近くたって親になった経緯がどうあれ、あんたが神詠の親なんでしょ？ 親が子供を否定したら子供がどう思うかぐらい分かってよ！」

一番愛してくれる存在であるはずの親に、否定される。

心はボロボロに傷つき、それでも親を恨むことはせず、“親を怒らせてしまう自分が悪い”と言い聞かす。

本当は優しい人なのだから、自分がいい子になれば親は笑いかけてくれると信じる。今の神詠のように。

だけど、そうやって自分自身をおとしめていても何も解決しない。親にも自分にも愛されない状態が続く……その苦しみは想像を絶する。

神詠も気丈に振る舞ってはいたが、心はどれほど蝕まれているのだろうか。

「私を……お前達も、私を責めるのか。私を責めて……王に相應しく無いと……？」

「……え、ちょっと神冥？」

王に相應しいかなど、そんな話は今はしていない。

明らかに先ほどまでと様子が変わった神冥に恐る恐る彪砂が声をか

けたが、その声も届いていないらしい。何かをブツブツ呟いている。

「私だって……愛そうとした。」

——いや。最初は純粹に愛していたのだ、我が息子を。

第9話 親の心、誰知らず

——我が子を純粹に愛せていたのは、いつまで？

第9話 親の心、誰知らず

10年前、世継ぎの誕生を民衆は戸惑いながらも歓迎した。

戸惑いながら、というのは現王である神冥もまだ即位したばかりの子供なのに——という率直な感情。

それでも神詠は父、神冥と全く同じ顔の利発そうな赤ん坊で、民衆はすぐに最初の戸惑いを忘れた。

神冥の周りにいる側近もそしてもちろん神冥自身も神詠を大事に育て、王に相應しいきちんとした躰を施した。

「神詠様は神冥様や代々の王のご幼少の頃と比べて、些か様子がおかしくはないか？」

古参の大臣や世話係達の間でそんな噂が交わされるようになったのは、神詠が生まれて2年ほど経った頃。

神詠は少しわんぱくだがいつも笑顔で素直な“子供らしい子供”に育っていたが、それが年寄り達には気に食わない。

王宮の片隅で彼らが眉をひそめあっていると、ぱたぱたと軽快な足音が聞こえてきた。

「皆実、東江、北居、西子！　こんなとこで何してるんだ？」

「ああ、神詠様……いえ、大した事ではございません。」
「…ふうん？」

笑顔で話しかけた神詠だが大人四人の厳しい表情に何か感じたのか、そのまま元来た方へ走っていった。
四人は顔を見合わせ、溜め息をつく。

「聞きました？ あの大暴言言葉使い。それに王宮内を走り回るとは、何と品のない……。」

「これまでの王と違い落ち着きありませんし、気に入らない事があると駄々をこねて……下々の子供のようなですわ。」

王の子は、王の優秀な遺伝子を丸々コピーして作られる“優秀な子”。

歴代の王と違って神詠は、王に長年仕えている彼らにとって明らか“異端児”だった。

封建的なこの空間で他の若い使用人や役人が上司である四人の古参に逆らえる筈はなく、神詠を庇える人間は神冥以外いなくなった。

「最近、使用人達の中に我が息子である神詠を悪く言う者がいるよ
うなのだが。」

神詠に対する使用人達の冷淡な態度や悪意が感じられる噂話に神冥が気付かないはずはなく、古参の四人を集めて状況を尋ねた。

「お言葉ですが、神冥様。神詠様は将来貴方様の後を継いで王となられるお方。ですが神詠様はあまりにも王としてのあるべき姿から掛け離れていらっします。」

自分の信頼している相手が言い放った言葉に、神冥は耳を疑った。

——まさか。この者達か、神詠を悪く思っているのは。

「…まだ二歳ではないか。多少元気なだけであろう。」

「歴代の王に誰ひとりとしてあのような者はおりませんでした。今の内に手を打たねば、近い将来この国は滅びます。」

「無礼者！ 現王である私の息子に対して何と言う言い草か！」

「王はこの国の二千年余りの歴史をご自分で終わらせるおつもりか。」

国が終わる。大臣が二度言った言葉はあまりにも衝撃的だ。

王とは言え幼い神冥は自分の五倍も歳をとっている大臣に対し、今度はすぐさま反論出来なかった。

「神冥様、神詠様が今の粗暴な振る舞いを直して王のお子様らしくなられたら、我々も神詠様を認めますとも。」

穏やかに諭すふりをして今の神詠を否定する。

「神冥様、今ならまだ最初から作り直さなくても間に合います。神詠様の躰を厳しくなさってください。それが貴方がたのためであり、この国のためです。」

「神詠の…：躰。」

自分が神詠と同じ歳の頃どのような子供だったかなど、覚えていない。

ただ、数年前急死した自分の父は自分に対して厳格で、手の届かない存在だった。

——神詠が王らしく育つかどうかは、私次第という事か？　大きくて強くて厳しくて遠かった、あの人のように、私も？

「分かった。私は必ず神詠を将来の王に相応しくしてみせよう。異論は無いな。」

「とーしゃん！　お話終わったのか？」

無邪気に駆け寄る神詠の言葉使いも仕種も、神冥は今まで放任していた。

「神詠、私の事は今後父上と呼べ。」

——幼いからといえ、それではいけないのだ、きっと。

誰にも文句は言わせない、二度とあのような暴言は許さない。

「お前は何度言えば分かるのだ！　一日十冊国政に関する本を読めと言っただろう！」

「ご、ごめん父さん。昨日はどうしても眠くて……」

「言い訳をするな！　それに言葉使いを直せ！」

厳しい躰も物言いも態度も、元は全て神詠の事を思ってたのこと。だが神詠はなかなか神冥の思う通りにならず、年が経つほどに苛立ち募る。

「またですか、神詠様。お父上のお小さい頃は怠ける事などございませんでしたよ。」

「西子……。」

古参世話係の西子が明らかに不機嫌な様子で姿を見せた。

「神冥様も……。王ともあろうお方がご子息の躰くらい満足に出来ぬとは、嘆かわしい事でございますよ。」

古参の四人をはじめとする役人や使用人は神詠だけでなく、ついに神冥の“王らしさ”まで疑い始めた。

——一体何が。何が間違っておるのだ。

この子が変わったのか、私の育て方がおかしいのか——既に“私の代から”おかしかったのか？

自らまでを否定しそうになって、この状況が嫌で、とにかく神詠さえ“まとも”になればこの苦しさから逃れられると——

『その結果が暴言か。神詠の否定か。』

冷たい声に顔を上げると、目の前に見えたのは神詠の姿——ではなく。

「お前……私か。神詠が小さい頃の……。」

弱々しく尋ねると、“彼”は首を短く縦に振った。

『忘れたのか。神詠が生まれた時私が……お前がどんなに嬉しかったか。』

「忘れてなどいない。いないが……神詠は普通の王とは違う、だから幼い内から厳しく躰をしなればと——」

『お前のやり方は駄ではない、神詠の全否定だぞ。』

幼い自分の言葉が、神冥に真っ直ぐ突き刺さる。

『お前がしている事は、あの大臣や世話係共と同じだ。神詠の為にあの者達を叱っただろう、もう忘れてしまっのか？』

「違う、私はあの者達とは――」

咄嗟に言い返そうとした刹那、脳裏に浮かんだのは――――傷ついた神詠の表情。

――ああ、そうか。同じだ。

守りたくて厳しくあろうとしていたつもりが道を踏み外し、あんなにも傷付けてきたのか――。

「ちょっと、神冥！」

苛立った椎香の声に我に帰ると、幼い神冥はもう消えていた。

「黙ってないで何とか言ったら!？」

「椎香、ストップ！」

再びつかみ掛かろうとした椎香を、彪砂が制止する。

「神冥、これだけは約束して欲しいの。神詠を頭ごなしに否定しないで。」

彪砂の言葉に神冥はゆっくりと、だが確かに頷いた。

「……戻るぞ。」

そしてバツが悪そうな顔でぽつりと呟き、元いた場所へと足を進める。

「何よそれ。彪砂、あれでいいの？」

「んー、完全な和解には時間が掛かりそうだけど。でも、あれでいいと思うわよ。」

椎香はまだ納得しきっていないようだったが。

「ほら、アタシ達も行くわよ。早く村目指しましょ。」

傾き始めた日が、長い一日の終わりを知らせていた。

第10話 「夢路様」

碧の宮、王宮都市の中心にある王宮、そのさらに中央にあるのが碧の神殿。

真の主である碧の巫女が不在の今は双子の妹である雪路が代理を努めている。

第10話 「夢路様」

「ほら、雪路様。神冥様と神詠様のことは彼らだけで何とかなさったようですよ。」

碧の神殿に出入り出来るのは巫女と雪路、そして二人の側近で占い師である紫杏だけ。

椎香達の様子を見るための水晶に手をかざした彼女は、隣にいる雪路にその映像を見せた。

「紫杏……あなたこうなる事が分かっていたのですか？」

「いいえ、全く。」

「えっ……なら何故、彼らの元へ行かせてくれなかったのですか。」

一行を碧の宮に連れてきた時や椎香と二人で話をしたときのように、彼らの側へ意識を飛ばして手助けしたかった。

だが、紫杏は雪路を行かせなかった。彼らから呼ばれない限り、行つてはならないと。

「雪路様。椎香様達は単なる“魂の入れ物”ではありません、ウィルス除去のために必要不可欠な存在です。ですが、今のあの方々はまだそれだけの強さはない……ですから、ここへ来るまでに強さを手に入れ成長していただかなければ。」

「その話は何回も聞きました。占いにそう出たのでしょうか？ でも手助けくらいは……。」

「それが必要最小限に抑えなければ。現に今回は必要ありませんでした。」

「……私が行っていたら、成長の機会を一つ無くしていたかもしれないという事ですか。」

一応は納得した様子で呟く雪路に、紫杏は無言で頷いた。

「それに、今一番やるせない気持ちなのは……近くで見ているながら何も出来ない“夢路様”達でしょう。」

「そうですね……。」

「疲れたー！」

所変わって、椎香達一行。

先日からずっと例の山にいるが、目指している次の村までようやくあと少し。

「なんなのこの山マジありえない。村まで遠すぎじゃない！」

「この坂登りきったら着くんだから頑張りなさい！」

世界は違えど夏の暑さは変わらない。長い山道に椎香はすでに音を上げ続けている。

「暑いんだけど！」

「みんな同じでしょうが！」

椎香と歩調を合わせながらなだめ続ける彪砂もキレかけ、見兼ねた十和が先頭を歩く緋凧に休憩を提案した。

「まったく、椎香はワガママなんだから。」

「何よ、しょうがないでしょ。都会育ちなよこっちは。」

ぶつぶつ言いながらも椎香と一緒にいる辺り、彪砂の面倒見の良さは相当なものだ。

「ねーねーしんえー。この実おいしいよー。」

「マジ？ 俺も食べたい！」

「あっちだよー。」

「…ほら、神詠達を見てみなさいよ。走ってるのよ。」

「子供の元気さと比べないでよ。」

彪砂はため息をつきつつ、つい昨日の騒ぎを思い出していた。

神冥と神詠がそれぞれ合流した後は何があったのかよく知らないが、神詠はいつもの元気を取り戻しているし神冥の仏頂面はいつもよりマシに思える。

「せっかく少し見直したのに。」

「え？」

「ほら、昨日神冥に怒鳴ったじゃない。あんたが親なんですよ！
って。意外と仲間思いなのねーって思ったんだけど。」

——違う……。

彪砂は何気なく言ったのだが、椎香は何故か適当な返事もせずに固まってしまった。

——違うの、別に神詠のために怒ったわけじゃない。ただ神冥がムカついた。

親のくせに自分の事しか考えていないあの姿は、嫌でも“あの人達”を思い出す——

『椎香、どっちについていくの？ 早く決めなさいって言ったですよ。』

『おい、俺は無理だったつたろ！』

——どっちかにしなさいなんて言われても、どっちも嫌。だって私聞いたもの、あの夜。私の事なんてどっちも——

「…香、椎香！」

彪砂に大きな声で名を呼ばれ、いきなり現実に戻された。

「どうしたのよ、急にぼーっとしちゃって。」

「あー…ごめん、何でもない。」

「おーい、そろそろ行くぞーっ。」

緋風の声で、完全に戻ってきた。もう終わった事、どうでもいい事。そう言い聞かす。

「ちょっとお、大丈夫？ まだ休憩するなら付き合おうわよ？」

「平気平気。」

「あ、あそこだよ！」

緋風と共に先頭を歩いていた露々が前方を指差した。緑の中に古風な家が10数軒。

「やっと着いた。」

「遠かったですね……。」

後ろを歩く神詠や羅歌、椎歌と彪砂も続々と到着した。

全員揃って村に入ると、まず老人の多さに気付く。そして次に感じるのは――

「……椎香、お前何かしたのか？」

「何もしてないわよっ。一体なんなのコレ？」

村人は最初一行に対し“ああ、旅の人かな”くらいの軽い視線を向けている。

だが椎香に焦点を合わせた途端それが驚きの眼差しに変わり、ざわめきが加わる。

「夢路様……夢路様が来られたのじゃ！」

一人の老婆がそう言ったのをきっかけに、周りの村人が「夢路様、

夢路様。」と有り難そうに拝み出した。

「はあ!？」

「な、なんだこの村。」

一行が混乱していると、奥の家から中年男性が慌てて飛び出てきた。

「ちょっとちょっと皆さん! この人は夢路様ではありませんよ、私の客です!」

村人達の間を掻き分け椎香達の所まで来ると、手近にいた緋風の腕を掴んだ。

「さあ皆さん、お疲れでしょう。我が家で休憩してください。」

そのままズルズルと緋風が引っ張られていったため、残りのメンバーもとりあえずその男性に着いて行った。

「私はここの村長です。村人達がご迷惑をおかけしまして……。」

言っているそばから村長宅の周りには先程の村人達が集まっている。村長が窓を開け、「夢路様ではないと言ったでしょうが!」と言って追い払った。

「あの……先程から話題になっている“夢路様”とは……?」

十和が恐る恐る尋ねる。村人達の様子から察するに、よほど崇められている存在だろう。

「夢路様は……この世界、碧の宮を治めておられる碧の巫女様の事でございます。」

「碧の巫女……。」

その存在だけは全員聞き覚えがある。この世界へ来てすぐに、雪路が言っていた。

そして、椎香だけは村長から聞く前にそのことを予想していた。

——『椎香こそが私の姉様に守られた“碧の宮の人間と一心同体の状態にある”人間だからです。』——

二人で話をしたときの、雪路の言葉を思い出す。

雪路の姉に守られている、一心同体にある自分、雪路とその姉は顔が瓜二つ、自分とそっくりな「夢路様」。

「村長さん。碧の巫女……夢路のこと教えてください。私に……私たちに、関係はあるの？」

村長はゆっくり縦に頷くと家の周りに人がいないかを再度確認してから、話を始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7569y/>

碧の宮

2011年12月31日14時48分発行